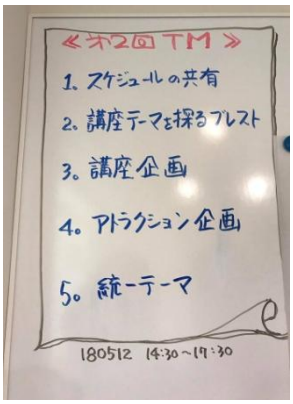
新建福岡・NOW

第18号 2018.07.04

発行元
新建築家技術者集団
福岡支部事務局
〒815-0041
福岡市南区野間 3-9-20-4F
[ケイ・プラッツ内]
Tel/Fax 092-541-8128
HP；shinken-fukuoka.net

2019 年夏の「建まちセミナー」は福岡支部が担当します

新建では毎年ごとの開催で、全国各地において「建築とまちづくりセミナー(略称：建まちセミナー)」を開催しています。毎回 100 名程度の参加で基調講演を行なったり、分科会に参加して、全国の会員と共に勉強と交流を深めます。全国の会員の方から、いろいろなお話が伺えるチャンスです。
2010 年に行なった「第 27 回全国研究集会 in 福岡」（会場：国立夜須高原少年自然の家）以来、福岡支部で全国企画を開催。実行員会を結成し準備を進めていきます。３月に第１回チームミーティング(ＴＭ)、第２回を５月、第３回を６月に行ないました。きょうは、第２回の様子を少し報告させていただきます。



この日のメニュー

巻口実行委員長がキーワードを整理

講座企画シート考え中

5 月 12 日（土）に大坪さんの事務所にて「2019 年建まちセミナーin 福岡ＴＭ②」が開かれました。参加は 12 名。A1 用紙に行程表が準備され、まずはみんなで今後のスケジュールを確認。巻口実行委員長と大坪さんのリーダーシップのもと、講座テーマを探るべく、ワークショップ形式での打ち合わせを行ないました。

まずは各自、気になるテーマやキーワードを大きい付箋に、何枚でも思いつくだけ書き出します。それを縦軸（福岡 ←→ 全国・非地域性）、横軸（建築・まちづくり ←→ コミュニティ・精神）の記された特大のホワイトボードへ、1 人 2 枚ずつ説明をしながら、該当位置へ貼り付けていきます。全員が 3 巡すると、ホワイトボードは興味深いワードでびっしりと埋まりました。この作業が思いのほか楽しく、「まずはキーワードを書く」というのが、意見発言のハードルも下げてくれ、またほかの人のワードにも触発され、新たなひらめきにも繋がるように感じました。そして、貼り出されたキーワードをみんなで眺めながら同テーマのものを寄せ集めて俯瞰することで、頭がすこし整理されます。

次に、A4 サイズの「講座企画シート」なるものが 1 人 2 枚ずつ配られ、各々、講座や講師の提案を悩みながらも記入。そして再び 1 人ずつ、自分のシートを簡単にプレゼンテーションしながらホワイトボードへ貼り出します。最初のステップがあってこそなのかな？と思いながら、面白そうな講座案か並ぶのを見ているだけでもワクワクしてきます。

最後に日程や会場の意見も出し合い、あっという間に 4 時間近くが経ってしまいました。そんなに熱中していたことにびっくり、これがワークショップというもののチカラなのか？！と思い、またワークショップの達人の大坪さんがいる福岡支部ならではのＴＭとなったのではないかと感じました。
嬉しいことに、川﨑さんの木造講座に参加してくださっている白石さんという女性が、会員外であるにもかかわらず参加してくれました。白石さんはたくさんの興味深いキーワードを挙げてくださり、ご都合で早めに帰るはずなのに時間を忘れてしまうほど、「面白くて熱中しちゃった！」と言ってくださっていました。(その後、無事に？早めに帰られました…）今回のＴＭの楽しさを裏付けしてくれるエピソードでは…と思っています。

まだまだ始まったばかりのＴＭ。次回以降もたくさんの方と一緒に、福岡支部らしい建まちセミナーをつくりあげていけたら、ととても、楽しみな気持ちです。（報告：中島梢）

1/29 １月例会「建築再生の可能性を探る ニューヨーク・ブダペスト・ウィーン・そして軍艦島」

語り手：片井克美　　場所：アミカス　視聴覚室

コンクリートを愛し、建物の再生・改修を通じて安全で快適な生活の持続を目指す元探検部が、好奇心旺盛に世界各地を訪ねました。多くのスライドを見ながらお話しをしてくださいました。

いつものようにチラシに書かれた「建物再生の可能性を探る」の言葉に惹かれて例会に参加しました。いつも何か持ち帰るのが出来るのが例会の楽しみでもあります。今回は何か新しい再生技術でも見せてもらえるだろうと勝手な予想を立てていたのですけども期待が外れたものになりました。

見せられたのは、多くの海外の再生事例です。ニューヨーク、ブタペスト、ウィーンと今までの片井氏の行動力の凄さを知りました。すべて自分の足で現地に行って撮った写真です。良くぞ、いろいろな国に行っているなと感心する次第です。

軍艦島に至っては観光客では入れないエリアの映像を３次元空間として認識できるアプリを駆使して、インナー空間として体感できることを、これまた 360 度カメラを自分で現地を撮影してきたものを利用して見せてくれました。新しい情報の見せ方を最先端の方法でやることが身近なものとなっていることを学べた一日となりました。

（報告：簑原信樹）

関心持ったのは「建築の寿命」という表現であった。建築に携わる人間は、関わった建物が末永く使って欲しいと思うのは当然のことである。しかし、現実はなかなかその願いがかなわない。学生時代を含めて全て二十歳代の仕事だったので、その建物の年限は大部経過している。所在は、京都、大阪、福岡、川内、名古屋とあちらこちら。しかし、建築の建物をデザインしたわけではない。建築構造を専門にしているので所謂「構造計算」をしたことがある建物である。建築物の寿命、耐用年数はどのように決まっているのだろうか。これは建物の生物学的な生命ではない。建築の社会的な存在としての機能性や存在価値が本来の耐用年限ではない寿命を規定している。建築は極めて重要な社会的な機能を有する存在だから、材料や構造やデザインがいくら主張しても社会的要求度が低くなれば代わりのものに取って代わられる。戦災やテロや災害によって余儀なく存在を失うこともある。

「再生の可能性」と言うテーマを個人的に勝手に解釈すると、存続の危機を如何に乗り越えるかという命題と考えた。今一つは建築物を文化遺産として歴史上にその存在を後世に継承するということを考えている。生物的な存在限界を超えて維持管理するにはその存続維持させるために社会システムと技術的な工夫が必要だ。国宝や文化財として指定し国がその存続と維持に責任をもって行う。

国際的に建築物の文化財的な価値を認められたものは多い。ニューヨークでは、メトロポリタン美術館とグーゲンハイム美術館に中央駅と地下鉄に乗った経験がある。ニューヨークを目的に行ったわけではない。日本から南米に行く途中で立ち寄ったのである。ハンガリーは、この国は是非訪れてみたいと思っていた。ドイツで会った中国の地質学者が北京からドイツにシベリア鉄道経由で来ていた。途中立ち寄ったブタペストがとても美しい街だったと印象を語って聴かせた。オーストリアは、ハンガリーに行く途中で経由したが、シュテファン教会と美術館・博物館に立ち寄り更に音楽を聴いてウイナーシュニチェルを食べるために。軍艦島は、長崎の外浦地区のカトリック教会・ドロ神父の遺産を改修する工事を九大の卒業生が従事していてその見学の延長線にあった野母岬の水仙と軍艦島の RC 住宅に伊江島経由で出かけた。

外国旅行の目的は古い建築物と美術館を観覧して、その後は自然景観を楽しむのが主要な狙いだった。美術館では主としてこれも歴史遺産や文化遺産を眺めて個人的な関心と英気を養った。「再生の可能性」と言うテーマはおよそ気が付かなかったので、新鮮な課題を考えるチャンスを与えられたが、同じ外国旅行をしても旅行者によって建築を見る目も随分違うなと感心しながら話を傾聴した。

これが率直な印象だったが、今一つ思い出すことがあった。21 世紀に入って九大と福大で、学部学科の改組やカリキュラム改定や JABEE ジャビーと言う世界的な建築教育の改変統一への動きの中で。「再生の可能性」という課題がどこかにあった記憶がある。新設の学科目として「都市災害管理学」と「都市環境管理学」という新しいアイデアの科目を新設した。その内容にこの「再生の可能性」という表現が丁度良いキーワードであった。機会があれば別のチャンスにその話題については譲ることしよう。　（報告：多賀直恒）

世界一美しいマクドナルド（ハンガリー）

2／24・25

新建ゼミＥシリーズ
「宅老所よりあいの活動を通じて見る建築とまちづくりの可能性」

24 日　第１部　講　演　「場を育む」　村瀬孝生氏（宅老所よりあい代表）
　　第２部　座談会　村瀬孝生氏、宮野みはる氏(地域住民)、濱崎裕子氏(利用者家族)（司会：大坪）
25 日　大坪氏案内による宅老所よりあい各事業所の見学（市内３か所）

この企画では建築とまちづくりを「実践から学ぶ」シリーズの話。そのモットーは、

◎様々な場面で建築が果たしてきた役割を地域づくりや空間づくりなどの事例から学ぶ。

◎よりよい社会の実現に向けて私たちの仕事がどんな力を持っているのか。一緒に考える。

企画者の言によれば、「宅老所よりあい」とは、1991 年、一人のお年寄りを支える取り組みに始まる地域福祉の砦、高齢者福祉分野の草分けである。「よりあい」の歴史を振り返ると、そこには常にお年寄りのための「場」づくりがあった。この講座では、「宅老所よりあい」の場づくりの歴史を通して「建築とまちづくり」の可能性について共に感じてみたいと思う。「建築とまちづくり」に携わる建築家、技術者の皆さん、特に建築を志す若人の皆さん、奮ってご参加を。と広く声を掛けていた。 その趣旨に賛同した。

この集いの趣旨によると、「建築とまちづくり」はその力を社会のために十分に発揮できているだろうか。「質実な建築」を通して人の暮らしや地域の人々のつながりを思うことが蔑ろにされてはいないだろうか。住宅は作り上げるものではなくカタログ商品となり、需要を超えるマンションが乱造されている。都心に残された大切なゆとりの空間も、知らぬ間に経済活動の舞台へと姿を変えている。遂に市民は「建築すること」への期待を失い、建築技術者も建築への無力感に慣れてしまったかのようだ。 この言葉の内容が深い。

当講座ではこのような問題認識に立って、様々な事例を見ながら改めて「建築すること」の可能性を感じてみたいと思う。初回は、「宅老所よりあい」の活動の歴史を取り上げる。高齢者福祉分野の草分けがどのようにお年寄りのための「場」をつくってきたのか。その歴史をとおして「建築とまちづくり」の可能性について共に感じてみたいと思った。

講演は、スライドプロジェクターの画面の映像を参照しながらの話を聴いた。その内容は、建築の背景調査・企画立案・実施設計・管理運用の各段階での具体的事例を通して、高齢者の介護と実践により生活する建築空間を地域社会でどのように高齢者の環境を見ながら周辺の環境と経済状況を上手くコントロールしながら実践していったのかを具体的な事例を挙げて分かりやすく解説と説明を聴いた。

そこには、全体を通して、建築に携わる人々が基本に考えなければならない重要な問題を学んだ。ハードな建築を造る前提から企画をし、設計して施工した後、いかに造られた空間が人によって使われ管理され運用されていくかという全プロセスに関しての基本があった。

講演会と座談会の次の日に福岡市内の三つの現場を見学した。
建物をハコモノとして作ったのではなく、地域に居場所となる拠点を狙って作ったというデザイン主旨を強く感じさせるような意志と狙いが表現されていた。建築技術者向けのセミナーではあったけど、高齢者が増える日本社会に在って未来に向けて建築だけに留まらず、現存するストックを有効活用し、空間構成に使い古された家具の有効利用と厨房や老人の居場所など広い視点から空間計画の現状認識が理解できた。

老人の生きる環境を整えるため救いたいという思いが、地域づくりに繋がって工夫されていた。そんな「場」が育まれていった過程の部分を見学して感動した。

一昔前の田舎の住まいには必ず縁側があった。その空間の意味を「地域の縁側」といった現代に読み直した設計のアイデアにも感動。最近の技術や電化で施設や設備が充実し内装や装飾も豊かで綺麗さを競っているが、高齢化に伴って記憶が追随できない高齢者には、生活経験のある和風住宅ならではの雰囲気や、障子・襖・畳の空間で寝転べたり柱に掴まれたり出来る程よい空間が似合う。高齢になってからの今は亡き母親のケアハウスでの終の住処となる間をどう繋いで行くかが老老介護をしながら地域の高齢者の相互扶助の在り方を考えさせられた。事例を見てそれまでは考え付かなかった現実をみて自分も更に年を取った時にどのような生活があるのだろうかと検討する具体事例を学んだようだ。

見学会は講演会の論理の解説とその「検証」的意味のシナリオがあり、随分高度な企画が読み取れた見学会と位置付けられていた。

このグループの強味は、現実に抱える問題を仲間で共有し議論し問題を発見して一緒に考える場を作って一般の関心を持つ建築に携わる人々に公開しているところが素晴らしいと感じた。このようなテーマを真顔で取り上げて違和感のないところが新建の良いところだと企画者が言うがその通りである。　（報告：多賀直恒）

会員の松野尾仁美さんの研究室から参加してくださった九州産業大学工学部住居･インテリア設計学科の学生３名からも感想が届きましたので紹介します。

今回、このような会に参加させていただき、本当にありがとうございました。講演会や現場見学を通して、お年寄りのリアルを知ることができました。宅老所よりあいは、様々なことが絶妙なバランスで成り立ち、穏やかにお年寄りが生活していることがとても素敵だと思いました。しかし、これを「あたりまえじゃないか」と言えず「素敵」と表現してしまうことが悲しいことに現状だと思います。実現すること、継続していくこと全てが難しいことかもしれませんが、何歳になっても、どのようになっても、あたりまえに生活出来る世の中になれるように考えていきたいと思いました。（上田果歩さん）

村瀬さんの講演会を聞き、宅老所の取り組みを初めて知りました。施設とは違った空間や取り組みに興味を持ち、実際に見学をさせていただき、懐かしいと感じる雰囲気にリロケーションダメージを生まない点があるんだなと実感しました。私は現在卒業研究で介護と地域について設計を進めているため、勉強になる点が多く、とても参考になりました。　（西村彩花さん）

宅老所よりあいは、地域に根付いており、サロンに気軽に遊びに行くことができます。そして、その流れで宅老所を知ってもらうと聞き、素敵な仕組みだと思いました。私の住んでいる地域でも、高齢者向けに宅老所などをまわるツアーはありますが、ここまで関わりを持つことは出来ません。見に行くのではなく、遊びに行く、日常に宅老所の存在があることで、身近に感じることができ、安心して入居できることに繋がるのだと思いました。

（酒井優衣さん）

木造連続講座「設計・現場で頑張る建築士のための木造講習会」スタート

第 1 回(5/9)の受講者 38 名（会員 17 名、会員外 21 名）、第 2 回(5/30)は 39 名（会員 20 名、会員外 19 名）と盛況なスタートです。第 2 回終了後の懇親会を案内をしたところ多くの参加があり、楽しく行ないました。「飲みにケーション」の力でしょうか、新建会員へ前向きに検討する仲間が急増中です。

後半の第 3 回(7/11)・第 4 回(7/25)講座が行なわれますので、あらためて予定をご確認ください。

第３回山歩きレク ～平尾台 貫山～

基山 405m（8 名）、可也山 365m（9 名）に続き、3 回目となる今回は平尾台の貫山 712m。
毎回、普段よりちょっとだけ運動になる山にメインは楽しくランチパーティをする目的で企画しています。今回の貫山は標高 700m 超ですが登り始めが 400mなので超初心者向けの山でした。3 回目だからか参加者はこれまでで最高の 15 名＋コック 1 名。恒例の各自おかずを 1 品持ち寄りに加えて考案していた特別メニューは山頂での参鶏湯（身が簡単にほぐれてトロトロになるように事前に仕込み）をふるまう予定でした。下山後はこれまた恒例の温泉に立ち寄り汗を流しノンアルコールで乾杯する予定でした。会員外の方も参加だったので、山の楽しさでまた会員増となる予定でした。なんてリアルな夢でしょう。

ですが・・・4 月 15 日、連日天気予報とにらめっこし、雨の予報が曇りのち晴れに変わりましたが、気温が低く風がつよい状況でしたので残念ながら今回は延期となりました。参鶏湯の仕込みもギリギリまで迷いました（コックがですが・・・）。まあ山が雨でなくなるわけではないので、新建のイベントは楽しい時にしたいという思いからです。

ただそんな天候でも、同じ場所で平尾台トレイルランニング大会が開催され、会員の上田さんが出場されています。（その報告は別で）

平尾台の延期時期は未定ですが、再企画の際はまた沢山ご参加ください。　（報告：巻口義人）

5/5 5月臨時例会「大牟田市役所本館の耐震診断報告書と評価書を読み解く」

主催：大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ　　場所：大牟田市役所

新建福岡支部からは、主催の新谷さんをはじめ講師の川崎さんを含め７名が参加しました。充実した内容の見学会や講演会の後は、締めの餃子の美味しいお食事会まで、大変楽しめた１日でした。

由緒ある名建築の大牟田市庁舎（昭和 11 年竣工）の存続があやしくなっていることから、構造設計の専門家である川崎薫さんに大牟田に来ていただき「大牟田市役所本館の耐震診断報告書と評価書を読み説く」と題して報告していただきました。耐震診断の結果と耐震補強の方法について専門的な立場から分かりやすく解説して下さり、新建のみなさまからも貴重なご意見を頂きました。厚く感謝申し上げます。

続いて、既に取り壊しになった、山田守設計の元熊本市役所花畑町別館の保存再生に取り組まれた「元熊本まちなみトラスト会長」で現在「NPO 法人熊本まちなみトラスト理事」の西嶋公一さん及び、「NPO 法人熊本まちなみトラスト事務局長」冨士川一裕さんに、その経験や熊本での町並み保全の長年に亘る取り組みを話していただきました。貴重な報告ありがとうございました。学習会の後は「奉天楼」という中国人経営の餃子の美味しいお店で楽しい懇親会を行いました。今後とも NPO 法人　熊本まちなみトラストの方々とは新建としても繋がりを取っていきたいと思います。（報告：新谷肇一）

5 月 5 日の休日に、由緒ある昭和 11 年竣工の名建築「大牟田市役所本館の整備を考える市民学習会」があった。存続を巡って、地元の議論が沸騰している。既に現地には一度訪ねていた。今日の集まりは、周辺に在住する関心ある市民が建築物の保存と取り壊しに関しての問題を議論する場が設定されたのだ。建物の存続に、市の議会での公式検討討議が行われていた。地元新聞の報道がある。そこで地元で建築関係の専門家集団や市民団体が、問題提起と討論の場を企画した。

重要なことは、この種の集いや運動は一種の市民運動であり市民活動であること。

そうした流れが一般市民を巻き込んで市民の意識を高め存続に関する住民の意向を反映して市の決定に反映させることだ。そのためには先ず現状までの経過を市民が知る必要があろう。それの為には地域誌によるマスコミ報道が重要である。事実関係を報道し専門家の意見と市の方針を併記すれば選択の議論ができる。

問題意識をもって企画し実行するには多大の時間と労力が必要だ。賛同者を募り議論を重ねて、ボランティア活動が必要だ。市の公式の見解は議会を通じての対応があるのだが、市民意識や市民感情には敏感の様だ。祝日の午後集まった人たちは、先ず現地である市役所の正面玄関前でこれまでの歴史的な経緯や戦争中の大牟田市の被災写真などを示しながら建築物としての設計者、施工者、その後の変状を外周を巡りながら解説し説明があった。残念乍ら休日ということもあり、内部の空間配置状況や仕事の実施風景は見学できなかった。一階の入り口のガラス窓から中を覗いて観察すると、露出した梁の端部にはハンチが付いている。建築構造の理論や設計法が当時どのように考えられていたのか、理論上は理解できるが、施工時の型枠や配筋が大変だっただろうと余分なことを感じた。

80 年以上も前に設計され使用されている状況は驚きがあるが、設備面や空間使用上の機能や部屋配置などには当然問題はあるだろう。外装に関しても当時のタイル仕上げが剥落して改装が余儀なく行われていた。古い歴史を秘めながら現状まで耐えて使用に供してきていた事実は素晴らしい。

見学後に行われた勉強会・学習会では、二つの話題が提示され参加者による活発な討議があった。建築物本体の逞しさを感じた。しかし乍ら、議論の内容は非常に拡散し留まるところを知らなかった。話の第一は、市が行った耐震診断書の内容に関する専門家による一般者向けの解説が行われた。診断結果に基づく耐震補強の考え方や方法に関しても説明があった。引き続いて、二番目に、熊本市における保存再生に取り組みに詳しいスピーカーが、「大牟田の保存運動に対してエール」というテーマで、全国的な動きや活動の紹介があった。

一般の関係者や市民レベルでの印象を聴くことが出来、興味深かったが、施工法の免震や耐震補強に対する費用など実務的には重要な指摘があった。特にコスト負担の面で、耐用年限と年次負担の関係で解釈が難しい議論になった。

集会終了後には、中国人経営の店で紹興酒を傾けながら餃子・麻婆ドーフ・炒飯を賞味しながら参加者の紹介があった。それぞれの人生に基づいた話題で議論が新しい分野や世界に発展していった。静かな落ち着いた雰囲気での取り留めのない話は、昼間の雰囲気とは違った交流の場になった。このような多業種の人々のザックバランな環境が今後の地方の再生や市民運動に繋がっていくことが出来るだろうと期待を持った。

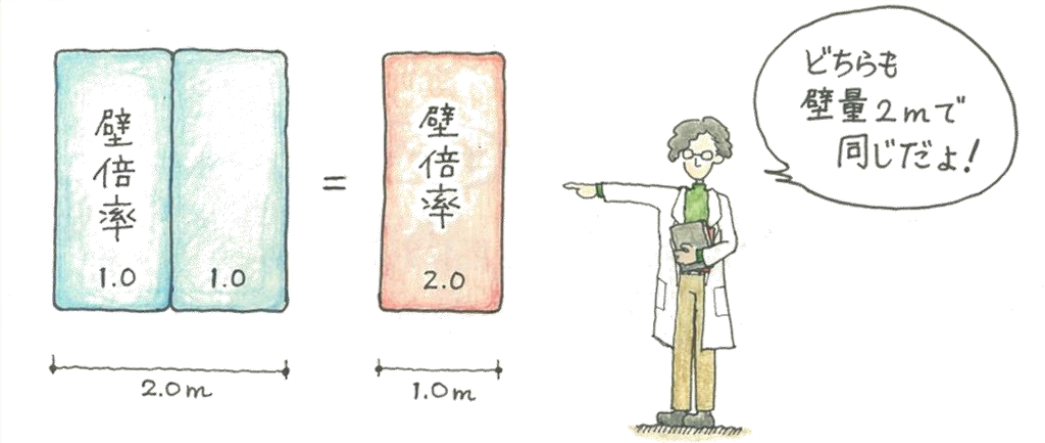
（報告：多賀直恒）

川﨑さんの 日本で一番わかりやすい 木造住宅(4号建物)の構造設計 3

昨年５月に出版した「在来軸組工法住宅の設計手法」より、皆さんの実務に役立つトピックスを抜粋してお届けします。今回は壁量計算の基本中の基本である存在壁量について。

存在壁量(m) ＝ Σ ｛ 耐力壁の壁倍率 × 長さ(m) ｝

★例えば・・
壁倍率 1.0 の耐力壁の長さ 2m と
壁倍率 2.0 の耐力壁の長さ 1m は
1.0×2m ＝ 2m 又は 2.0×1m ＝ 2m で同じ存在壁量になります。



★壁倍率は（片面+軸組+反対面）の合算値とする事が出来ます。
ただし、１枚の耐力壁の最大壁倍率は 5.0 倍です。

（株式会社川﨑構造設計　川﨑薫）

新建福岡恒例の花見 2018 レポート

３月下旬のある日、初めて新建の花見に参加しました。大坪、片井、新谷、牧口、紅一点矢野各氏と私の６名で上之橋御門跡前に集合。桜はまだ５分咲きで、思いのほか人もそれ程多くはありませんでした。何時もの花見と同じようにデパ地下でビールとツマミを購入してぶら下げて行ったら、なんと手ぶらの人もいて新参者は戸惑うのでした。更に広場に並んでいる屋台もまだ開店前で少し拍子抜け。まだ明るいうちにぶらぶらと歩き、お濠端のベンチに座って持ち寄ったビールを分け合い、ささやかに花見の第一弾、何か物足りない、、、しかし新建の花見は、これはまだほんの序盤なのでした。その後やっと暗くなり、ライトアップされた城跡の桜を眺めながら気分を盛り上げて赤坂の居酒屋「しげ忠」へ。いやいやこれからが花見の本番でした。アルコールの量と共に話題は、新建の昔の話から、某女子の過ぎ去った恋の話まで深?く、そして幅の広い話題で盛り上がったのでした。いつの間にか私も立上がって踊らされる羽目に、、、あ?これが新建の花見なのか、、、お酒はインドアなのね。さ?て、来年はどうしましょ。　（報告：照井善明）

― 次号から新連載がはじまります ―

今年も、舞鶴公園の桜に春をあそび、警固にある居酒屋で酒に話に盛り上がっていた時でした。
何の話題がきっかけだったのか思い出せないのですが、若い頃、インテリアデザインの勉強に行ったデンマークで、一人の日本人男性と出会い、恋をしたこと。留学期間の１年を終え一人帰国したこと。数年後、親の反対を押し切って、始めての福岡に降り立ったその男性と結婚したこと。夢中で生きていたあの頃の自分が、今、本当にいとおしく、別れた後も私にとって、大切な時間だったこと。
そんな酔っぱらい女の思い出話を、楽しく聞いてくれる福岡の仲間に乾杯！
“小説みたい”“建まちに、その前に福岡 now に連載しよう”そんな、冗談のような、暖かい！お言葉が、本当になりました。

編集後記

今号も盛り沢山の内容です。来年夏、新建福岡で開催する全国企画の「建まちセミナー」の意気込みが伝わります。今号のメイン企画、新建ゼミ E シリーズは全国的に注目を浴びる宅老所よりあいの活動をモデルにした先進的事例の裏付けをもつ内容です。（新谷肇一）

（原稿とりまとめ：新谷　レイアウト：月成）